

[原著論文]

## 臨床実習を通しての理学療法学生の認識レベルの変化

古西勇、高木昭輝、黒川幸雄

キーワード：臨床実習、理学療法学生、認識レベル

### Changes of Physiotherapy Students' Perceived-level through Clinical Learning Experiences

Isamu Konishi, P.T., Akiteru Takagi, Ph.D., P.T., Yukio Kurokawa, Ph.D., P.T.

#### Abstract

**Background and purpose** With the increase in the number of undergraduate Physiotherapy students, the placement for their clinical training is an overwhelming burden for educational institutions. To find the solution, there is the urgent need to review the significance of the clinical training. This study aimed to identify standards criteria that clinical educators consider important for their Physiotherapy students to possess, and to identify the criteria such students change their perceived-level through the clinical learning experiences.

**Method** Evaluation sheets for the previous third-year students were analyzed to categorize appropriate groups of items for the standards criteria. Based on the criteria a 36-item questionnaire was formulated. The items were classified into four large criteria consisted of "knowledge, ability to express oneself and to solve problems", "attitude, character and emotional aspect", "relationship with patients" and "ability to carry the assessment of patients". The present third-year students were surveyed with this questionnaire. They were asked to indicate the grade (as one of 0-10 integral numbers) that they perceived to be suitable for their abilities/qualities for each item prior to and after their clinical training period. The data were compared by means of Wilcoxon's signed-rank test (two-sided). We considered  $P < 0.05$  as significant.

**Findings** Fifty students were eligible for the assessment. Eleven items over the four large criteria changed significantly through their clinical training period. Three items from the "knowledge, ability to express oneself and to solve problems" criterion, two items from the "attitude, character and emotional aspect" criterion and one item from the "relationship with patients" criterion decreased. The most common one with items increased through the clinical training was the "relationship with patients" criterion. Three items from the criterion increased, together with one item from the "attitude, character and emotional aspect" criterion and another item from the "ability to carry the assessment of patients" criterion.

---

新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科

古西勇 新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科

[連絡先] 〒 950-3198 新潟市鳥見町 1398 番地

TEL・FAX : 025-257-4732

E-mail : konishi@nuhw.ac.jp

**Conclusions** The standards criteria seems to reflect the important aspects of the abilities/qualities clinical educators consider important for their Physiotherapy students to possess.

**Key words** : clinical learning, physiotherapy students, perceived-level

## 要旨

増え続ける理学療法学生のため臨床実習先を見つけるのは教育機関にとって圧倒的な負担となっている。この問題を解決するため、臨床実習の位置づけを見直すことが急務となっている。本研究の目的は、臨床実習に臨むに当たって理学療法学生が備えていることを臨床実習指導者が期待する基準を明確にし、学生の臨床実習を通しての変化をそれらの基準から検討することである。前年度の3年生の臨床実習評価表を分析し、基準となる項目を上げた。それに基づき「知識・表現力・問題解決能力」「態度・性格・情緒面」「対患者関係」「評価実行力」の4分類36項目のアンケートを作成した。このアンケートを用いて、現在の3年生の自己認識のレベルを調査した。回答は、0（全くない、全くできない）～10（充分にある、充分にできる）までの整数の自己評価として、臨床実習前と終了後のデータをWilcoxon signed-ranks test（両側検定）を用いて比較した。有意水準は5%とした。50名分の有効回答があった。4分類に亘る11項目が臨床実習前後で有意に変化した。「知識・表現力・問題解決能力」の3項目、「態度・性格・情緒面」の2項目、「対患者関係」の1項目が低下していた。上昇した項目は「対患者関係」で3項目と最も多く、「態度・性格・情緒面」と「評価実行力」の各1項目でも上昇が見られた。

## I はじめに

理学療法士養成校の増加や定員の拡大により、理学療法学生（以下PTS）は年々増え続けている。彼らのため臨床実習先を見つけるのは教育機関にとって圧倒的な負担

となっている。この問題を解決するため、臨床実習を量的に短縮することや時期をずらして行うことなどが考えられている。それに伴い、理学療法士養成教育の中で臨床実習の位置づけを見直すことが急務となっている。

Bennett<sup>1)</sup>は臨床実習指導者（以下SV）の持つべき能力や資質に関するアンケートを作成し、それを用いてPTSをチームで指導することの有用性を示した。金子<sup>2)</sup>は、大学教育等の大綱化という指針に従った養成校それぞれの改訂されたカリキュラムにより臨床実習生のレベルの変化が臨床実習のあり方にも影響を及ぼすのではないかと想定し、PTSの能力の把握に基づいた教授計画策定を勧めている。PTSの能力や資質の全体像を把握するには、SVがPTSを評価する臨床実習評価表が有用な情報を提供してくれると考えられる。

大工谷ら<sup>3)</sup>は、3回の臨床実習を経験したPTSを対象に臨床実習の成績に影響する要因を検討し、情意面の意識づけと理学療法評価能力が総合評価に大きく影響するという結果を導いた。縄井ら<sup>4)</sup>は、PTSとその指導者を対象に、臨床実習での達成度に関する質問紙による調査を行い、7割以上のペアで評価の差が認められ、PTSの低い自己評価を明らかにした。いずれも、最終学年のPTSを対象とした研究である。

本研究の目的は、臨床実習に臨むに当たってPTSが備えていることをSVが期待する基準を明確にし、PTSの臨床実習を通しての変化をそれらの基準から検討することである。

## II 方法

基準となる項目を上げるため、本学理学療法学科の前年度3年生(50名)の臨床実習評価表を分析した。本学では3年生の臨床実習はPTSが初めて患者に1対1で触れる機会であり、3週間で患者を評価し治療プログラムを立案するまでを目標とする。実習を終えたPTSを評価してSVにより自由記載された「今後、改善が必要と思われる」能力や資質の文章を要約し、類似する内容のものを1つの項目としてグループ化し、全体の項目を先行研究<sup>3-4)</sup>の質問紙を参考に分類した。

要約の項目と分類に基づいて、アンケートを作成した。「知識・表現力・問題解決能力」(11項目)、「態度・性格・情緒面」(12項目)、「対患者関係」(5項目)、「評価実行力」(8項目)の合計4分類36項目の質問による構成とした。

臨床実習を通してのPTSの能力や資質に関しての認識の変化を明らかにするため、このアンケートを用いて、現在の3年生(55名)の自己認識のレベルを調査した。時期は、前年度3年生と同じ臨床実習の前と終了後とした。調査にあたっては、記入内容が成績に影響するものではないことを説明した。臨床実習前は臨床実習開始10日前に行ったオリエンテーションの時間に配布・回収を行い、実習を終了した次週に同じ内容のアンケートを配布し、概ね数日以内に回収した。

回答は、「全くない」「全くできない」を0、「普通にある」「普通にできる」を5、「充分にある」「充分にできる」を10とし、それを参考基準として、0～10までの整数で自己評価してもらった。臨床実習前と実習終了後の両方のアンケートに回答した50名(男25名、女25名)を有効回答者数とした。データは離散量のためWilcoxon signed-ranks test(両側検定)を用いて臨床実習前と終了後の

比較を行った。有意水準は5%とした。

## III 結果

臨床実習前後で有意に変化した項目は11項目あり、4分類全てに亘っていた(表1)。他の25項目では、臨床実習前後で有意な差は見られなかった。有意に低下したのは6項目、有意に上昇したのは5項目とほぼ同数であった。

「知識・表現力・問題解決能力」の分類では、変化のあった「運動学」「考えの表現」「文章表現」3項目のいずれも低下していた。「態度・性格・情緒面」の分類では「計画性」と「提出期限が守れる」の2項目が、「対患者関係」の分類では「情報収集」の項目が低下しており、「評価実行力」の分類では有意に低下した項目はなかった。

有意に自己認識が上昇した項目は、「対患者関係」の分類で「問診」「信頼関係の形成」「リスク管理」の3項目と最も多かった。「態度・性格・情緒面」の分類の「コミュニケーション」、「評価実行力」の分類の「問題点の抽出」の各1項目でも有意に上昇していた。

## IV 考察

臨床実習に臨むに当たってPTSが備えていることをSVが期待する基準として今回使用した4分類36項目は、SVが自分の言葉でPTSに向けて表現してくれた内容を反映しており、より現実に即したものとなっている。これらは、西本<sup>5)</sup>が全国養成校を対象に調査した、SVから指摘されるPTSの情意領域の問題傾向の多くとも一致する。

大工谷ら<sup>3)</sup>は、PTSが知識や技術を適切に評価されるには最低限の情意面が維持されていることが必要であるとし、教員側が学内でPTSの情意レベルを評価しSVに伝えることを提言している。今回の研究において、情意面に関係する項目の中で「コミュ

表 1 臨床実習前後における学生の自己認識の変化

(n=50)	臨床実習前		臨床実習後		
	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲	
<b>知識・表現力・問題解決能力</b>					
解剖学	4.5	2	4	2	
運動学	4	2	3	2	*
応用能力	4	2	4	2	
柔軟性	5	2	5	2	
考えの表現	5	3	4	2	*
気持ちの表出	5	3	4.5	1	
報告・相談	5	3	5	2	
調べること	6	3	5	1	
覚えること	4	2	4	2	
専門用語の使用	4	1	4	2	
文章表現	5	1	4	2	**
<b>態度・性格・情緒面</b>					
質問	6.5	3	6	2	
コミュニケーション	6	3	8	2	*
挨拶	8	3	9	2	
言葉遣い	6	2	7	3	
礼儀	7	3	7	3	
探究心	5	2	5	2	
積極性	6	3	5	3	
精神的強さ	5	3	5	3	
計画性	5	3	5	2	*
提出期限が守れる	8	5	7	6	**
情緒的安定	6	3	7	3	
思いやり	5.5	2	6	2	
<b>对患者関係</b>					
オリエンテーション	5	2	5	2	
情報収集	5	1	5	2	**
問診	4.5	2	5.5	2	***
信頼関係の形成	5	1	7	3	***
リスク管理	4	1	5	2	**
<b>評価実行力</b>					
適切な項目選択	4	2	5	2	
信頼性のある方法	4	2	4	2	
動作・歩行分析	4	2	3	2	
統合と解釈	4	2	4	2	
障害構造の分析	4	2	5	2	
問題点の抽出	4	2	5	2	*
治療に向けた考察	4	2	4	1	
全体像の把握	5	1	5	2	

臨床実習前後で、「全くない」「全くできない」を0、「普通にある」「普通にできる」を5、「充分にある」「充分にできる」を10を参考基準として、0～10までの整数で自己評価してもらい、ウィルコクソン符号付順位和検定を用いて差を比較した

\* p<0.05 \*\* p<0.01 \*\*\* p<0.001.

ニケーション」の項目が唯一臨床実習前後で有意に上昇していた。「計画性」や「提出期限が守れる」などの項目は、逆に有意な低下が見られた。情意レベルの自己認識の変化がSVによる総合評価に与える影響について、さらに検討が必要とされるが、基準の中で情意領域の分類と項目を位置づけることの重要性が示唆される。

「对患者関係」の分類は5項目で構成され今回の分類の中では一番項目数が少なかったが、そのうち4項目に臨床実習前後で有意な変化が見られた。患者に関する「情報収集」が有意に低下したのを除くと、「問診」「信頼関係の形成」「リスク管理」の各項目で有意な上昇が見られ、基準の中で検査・測定の前段階の課題に即した領域を設けることがPTSの自己認識の変化を捉えるのに有用である可能性が考えられる。

「評価実行力」の分類も、同様に臨床実習の課題に即した領域といえるが、項目数の割には臨床実習前後で有意な変化が見られたのは「問題点の抽出」1項目だけと少なかった。PTS自身にとって、臨床実習を終えても理学療法評価の過程は様々な疾患や障害を想定して繰り返し学習を重ねていかなければならない。次の臨床実習に向けて、これらの基準を用いて定期的に自己認識の変化を評価することは、その学習過程を評価することになると考えられる。

縄井ら<sup>4)</sup>はPTSの自己評価とSVによる評価では差が多く生じていることを示し、PTSの自己評価が低いとSVが感じた場合は、達成可能な課題を多く設定して成功体験を多く積み、学習への動機付けを強めるという指導法を行うことを勧めている。今回の研究では、臨床実習を通して、PTSの自己評価として基準がどのように変化するかを明らかにしたが、SVによる評価を同じ基準で行ってもらいそれと比較するところまでは至らなかった。今後は、臨床実習

評価表との関連も含めてさらに基準の活用の可能性を検討していきたい。

## 文献

- 1) Bennett R: Clinical Education: Perceived abilities/qualities of clinical educators and team supervision of students, *Physiotherapy* 89(7), pp432-40, 2003.
- 2) 金子誠喜: 新人教育プログラム教本 第7版. (社)日本理学療法士協会, pp.111-119(第13章), 2004.
- 3) 大工谷新一, 谷埜予士次, 西守隆ら: 臨床実習の総合評価に影響を及ぼす要因に関する研究. *理学療法科学* 19(3), pp.223-227, 2004.
- 4) 縄井清志, 清水和彦: 理学療法科教育における臨床実習生の自己評価と臨床実習指導者の評価の差の研究. *理学療法進歩と展望* (15), pp.51-59, 2001.
- 5) 西本勝夫: 臨床実習における学生の管理について. *リハビリテーション教育研究* 2, p33, 1997.